



インタビュー

# 多様でありながら、ひとつ

2025年大阪・関西万博では、「多様でありながら、ひとつ」という万博会場の理念を表すシンボルとして、大屋根リングが会場を取り囲む。日本の伝統建築工法「貫接合」と最先端の建築技術が融合し、世界最大の木造建築物としてギネス世界記録にも認定された。リングの上に登ると、世界が一堂に会する会場を一望でき、周囲の海も見渡すことができる。こうした壮大な会場デザインの構想はどのようにして生まれたのか。

建築家の藤本壮介氏に、会場デザインプロデューサーとしての信念と覚悟、会場設計の意図や大屋根リングを構想した背景、万博を通じて若い世代に受け継いでいきたいことなどを伺った。

2025年大阪・関西万博 会場デザインプロデューサー  
建築家／藤本壮介建築設計事務所主宰

**藤本 壮介**  
ふじもと そうすけ



## 会場デザインプロデューサーとしての信念と覚悟

2025年大阪・関西万博の会場デザインプロデューサーを正式に打診いただいたのは2020年春です。それ以前にも万博招致のプランについて自由に意見交換を行う機会がありました。まさかと驚きました。

当時は新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、東京オリンピック・パラリンピックの延期の是非が侃々諤々議論されている渦中で、万博もオリンピック・パラリンピック同様に国家プロジェクトですので、この役目を引き受ければ、大きな議論の渦中に身を投じることになるのは間違いなく、相当な覚悟が必要でした。

そこで、この時代に万博を行う意義について心底納得し、信念を持てなければ引き受けることはできないと考え、まず、万博の歴史を勉強することから始めました。万博は、1851年の第1回ロンドン万博に始まり、紆余曲折を経ながら、今世紀に入ってもなお続いており、大阪・関西万博では、世界の国の約8割を占める国々の参加が見込まれていました。多様性がうたわれる半面、コロナ禍によって分断が加速する状況のもと、150以上もの国々が、文化や歴史、伝統などの全て

を持ち寄り、半年もの間、顔を合わせて共に過ごしながら未来について一緒に考える万博は、限りなく尊いものを感じられました。

また、万博では、若い世代が世界と出会い、世界中の人々と共に何かを行う楽しさを体験することができます。こうした経験は将来、海外進出や国際的な活動に携わる人たちにとって、大きな刺激になるでしょう。万博は、未来を創る若者や子どもたちにもたらすのです。

1970年の大阪万博について、基幹施設プロデューサーであった建築家の丹下健三さんが残した素晴らしい会場計画も読み込みました。これは今あらためて考えても、とてつもない構想でした。

このように万博の価値を一つずつ考える中で、たとえ賛否両論が様々に巻き起こるような事態となっても、この役目を引き受ける価値があるし、やるからには全力で取り組むたいと思つたのです。実際、様々な批判も受けています。それでも、私たち以上に深く考え抜いて批判をしている方は、今のところお見

## 万博は多様な営みを引き寄せ加速させる 巨大な「磁場」だ

かけていません。そのぐらい私たちは深く考え、時間を費やして作り上げているのだという自負があります。批判を無視するというのではなく、批判は批判として受け止めますが、「いや、そういうことじゃないよ。万博っていいのはもつとすごいものなのだ」と信念を持って取り組んでいるのです。

開幕を間近に控え、世界中の人々が1カ所に集まり、リアルに顔を合わせて共に過ごしながら未来を創るといふ万博の価値に日々触れていますし、その印象はますます強くなっています。万博は巨大な「磁場」だと実感しています。これまで着々と積み重ねられた文化活動、経済活動、国際交流といった多様な営みを引き寄せ、万博の周りを渦巻くように連動し加速しているように思います。

### リングで多様な世界をつなぐ

今回の大阪・関西万博は、史上初の「海の万博」と言われています。会場となる夢洲から瀬戸内海へと抜ける海域は、昔から船が行き交い、奈良時代や平安時代に、唐やインド、ペルシアといった国々との国際交流の要路で



した。この場所で、時代を超えてもう一度、巨大な国際交流の場である万博が開催されるという意義を深く感じています。

一方で、夢洲自体は新しく作られた島なので、基本的に何もない埋め立て地です。私は設計や構想を進めるうえで、その場所の来歴を発想の手がかりとしますが、そうした要素がほとんどなく、建築用語で言えば「コンテクストがない」、非常に難しい場所だというのが最初の印象でした。

とはいえ、ゲートの位置や来場者の動線、パビリオンの数といった機能的な与件は明確だったため、まずはそこから会場設計の検討を進めました。混雑しないことが重要だったため、来場者がスムーズに移動するための動線を検討した結果、直線の大通りや中央広場は作らず、1カ所に集中させない円環状の回遊路を構想しました。

さらに、多様性を持ちながらも世界が一つの場所に集まってつながるという、万博の大きなテーマを見据え、来場者の方々に、今まさに自分もこうした世界の中にいるという実感を持っていただきたいと思いました。また、来場できない人でも、会場の画像などを通じて多様な世界が一堂に会していることを感じ、「万博は多様な個がつながる尊い場なのだ」という大きなメッセージを世界中に発信した

は、8人のテーマプロデューサーによる「シグネチャーパビリオン」です。それぞれのパビリオンには個性があり、いい意味で中心がなく、どれか一つを真ん中に置くことにはなじみません。また、今の時代には人工物ではなく、自然物を据えるべきと考え、「静けさの森」、森林を配置しました。「非中心」という考え方で配置をしていったわけです。こうしたプロセスを経て、会場の形が定まってきました。

**世界が一つの場所に集まってつながるという万博のテーマを、来場者の方々に実感していただきたい**

いと考えました。

そこで会場を大きな円形のリングで囲み、その中に世界中のパビリオンを配置することとしました。これにより、多様な世界をつなぐというメッセージを、国境や世代を超えてシンプルかつストレートに伝えることができると考えたのです。このように、機能性と、会場内外へのメッセージの両方から、会場デザインを形作っていきました。

**丸く切り取られた空を主役に**

初めて夢洲を訪れたとき、何よりも印象的だったのは、空の美しさでした。空を見上げながら、「何を作ったとしてもこの空には勝てない」と思いました。それほどきれいだっただけです。そこで、むしろ空が主役になるような会場を設計したいと考え、その時すでにリングの構想はあったので、来場者が見上げると丸く切り取られた空を感じられるようにしました。様々なパビリオンを体感した来場者が丸く切り取られた一つの空を一齐に見上げるその時、世界が一つの空を共有するという瞬間を作ろうと考えたのです。

**持続可能な社会の象徴へ  
―大屋根リングに木材を活用した意図―**

大屋根リングは、これからの持続可能な社会の象徴として、中心に据えた森と連動させて木造にしました。特にここ10年ほど、大規模木造建築物が世界中で急速に注目を集めていることを実感してきており、万博で構造物を作るにあたり、今の時代に木造でないものは、おそらく世界的に許されないだろうと考

大屋根リングは来場者を雨や日差しから守る屋根の機能も果たすこととなります。万博の開催期間は、梅雨や夏の猛暑も予想されることから、こうした機能は不可欠です。大屋根リングは、外側が高く(20m)内側が低い(12m)すり鉢状であり、上に登れます。リングの内側からは、パビリオンや地上を歩く人たちがよく見えます。他方、外側の先端まで登ると会場が一望でき、目の前で世界がつながっていることを実感できるようにしています。さらに、外側からは、会場周辺の瀬戸内海や大阪、神戸を見渡せ、周辺地域とのつながりを感じることもできます。

1970年大阪万博の会場では、丹下プロデューサーが手がけた「お祭り広場」の大屋根には丸い穴が開き、そこから太陽の塔が顔を出していました。空が生態系の象徴、塔が命の象徴だったわけです。今回の万博の丸く切り取られた空は、同様に生態系と命の象徴として、1970年と2025年の万博をつなぐ存在とすることも意図しました。また、会場の中心にシンボルを置くべきか、悩みました。万博のメインパビリオン

えたのです。日本は古来、木造建築の技術や伝統を有しており、森林資源が豊富です。こうした要素と現代の建築技術を組み合わせることで世界に発信したいと考えました。

2020年末に当初の計画案を発表した際には、これだけの規模の木造建築物を作るにあたり検証が必要でした。そこで、その後1年ほどかけて、木材の調達や技術的な実現可能性、制作期間、費用といった課題を一つひとつ検証したうえで実施に至りました。目指



大屋根リングの木造構造

提供：2025年日本国際博覧会協会



提供：2025年日本国際博覧会協会、大林組 撮影：伸和

すべき姿とその実現に向けた課題を明らかにし、それを乗り越えていくのがイノベーションの重要なプロセスです。とても貴重な経験でした。

リングの約7割に福岡県をはじめとする国

産の木材を使うことにしたのも、新たな付加価値につながったと思います。日本の林業全体の再活性化の一つのきっかけにしたいと考えています。他方、木材の国内生産量と比較すると、大屋根リングに使用した木材は微々たるもので、日本の林業はまだ厳しい状況にあります。今回の万博で、木材やその関連技術を、これだけ大規模な木造建築物によって世界に大きく発信できるのは、非常に意義深いと考えています。

また、リングには日本の伝統建築工法「貫接合」を採用しました。しかし、それだけでは現代の耐震基準をクリアできないため、新たに開発した金属製の部品をくさびとして活用し、施工会社が何度も実証を重ねてくれました。伝統技術と現代技術との融合により未来を創っていくことができました。

### 見逃せないシグネチャーパビリオン —多様な個をとがらせ、世界と共鳴しよう—

世界が集まる場を目の当たりにする体験は

万博の最大の魅力です。先ほどお話ししたとおり、大屋根リングに登って歩くだけでも、世界が一つに集まった風景に圧倒されると思います。また、パビリオンのコンテンツもさることながら、各国の伝統音楽の演奏や食べ

物など、様々な形で世界の人々や文化を目の当たりにし、そこから何を感じ取り、どのような未来を一緒につくっていくか考えることも、心躍る体験となります。このほか、ウォータープラザで練り上げられる噴水のスペクタクルなショーも見事です。こちらもぜひ体験していただきたいと思っています。

シグネチャーパビリオンは、各プロデューサーがそれぞれの個性を全力で表現しており、博覧会協会がそうした取り組みにプレーキをかけることなく実現しています。これは日本の公共的なプロジェクトとしては、非常に勇気が必要だったと思います。しかし、これからの時代は、そつなく正しい一般論を打ち出すよりも、多様な個が何かを追求することの方が世界に響きます。こうした意味で、シグネチャーパビリオンはこれからの時代を象徴するものになっていくのではないかと考えています。各プロデューサーが描くビジョンが世界と共鳴するその「飛距離」が重要です。個をとがらせることで、世界へつながり普遍的なものが生み出せるのです。

1970年大阪万博では、当時の若手建築家であった磯崎新さんや黒川紀章さんがパビリオンなどの設計にかかわり、その後の日本の建築界を支える存在となりました。今回の万博でプロデューサーを拝命して必ずやろう

と決めていたのは、若手の建築家を起用するプロジェクトです。20組の若手建築家たちが限られた予算の中で工夫を凝らし、トイレや休憩所、ポップアップステージなどの施設の設計を担っています。現在続々と建物が出来上がってきていますが、千差万別で多様な魅力にあふれています。若い方々が、生き生きと活躍できるよう応援する世の中であれば未来はありません。彼らのプロジェクトが、建築家を目指す人たちだけでなく、様々な分野でこれから活躍していこうという若者を勇気づけることにつながってほしいと願っています。

### この先の50年をつくる若者に 勇気と未来を与える

私はいま、東京の他にパリと深圳と仙台に事務所を構え、世界中の様々なプロジェクトに携わっています。その原点には、大学時代にヨーロッパを旅して建築を見て回ったこと、その時の興奮や好奇心を刺激された体験があり、建築へのパッションを支え続けていると強く感じています。

世界は、まだ知らないことであふれています。世界と出合うということは、好奇心を解放するということです。自分を開いて世界に飛び込んでいくことで、違う自分が変わっていくという感覚を得ることは、今の若い人たちにとつても面白い体験になるのではないかと思います。

万博閉幕後の大屋根リングの利活用方法など物理的なレガシーについては、現在も議論を進めています。しかし万博の最も重要なレガシーは、人です。万博は半年しか開催されないイベントですが、1970年の大阪万博がそうだったように、それを経験した人のその後の人生が変わり、日本という国すら変わっていく強烈なきっかけになるのが万博です。直接的な経済効果をはるかに超えた、この先の50年をつくる若者や子どもたちに勇気と未来を与えるということが、万博の最大のレガシーではないでしょうか。こうした意味で、万博は非常に価値のあるイベントですし、それで未来は変わると確信しています。

2025年2月27日  
聞き手：経団連広報本部長 長谷川雅巳

## 若者や子どもたちに勇気と未来を与えることが、 万博の最大のレガシー

### 藤本 壮介

ふじもと そうすけ

1971年北海道生まれ。東京大学工学部建築学科卒業後、2000年藤本壮介建築設計事務所を設立。2014年フランス・モンペリエ国際設計競技最優秀賞（ラルブル・プラン）に続き、2015、2017、2018年にもヨーロッパ各国の国際設計競技にて最優秀賞を受賞。国内では、2025年日本国際博覧会の会場デザインプロデューサーに就任。2024年には「(仮称)国際センター駅北地区複合施設基本設計業務委託」の基本設計者に特定。主な作品に、ブダペストのHouse of Music (2021年)、マルホンまきあーとテラス 石巻市複合文化施設 (2021年)、白井屋ホテル (2020年)、L'Arbre Blanc (2019年)、ロンドンのサーペンタイン・ギャラリー・パビリオン2013 (2013年)、House NA (2011年)、武蔵野美術大学 美術館・図書館 (2010年)、House N (2008年) 等がある

